

(別紙様式1)

令和6年度 研究推進計画書

学校名 伊丹市立笹原中学校

校長名 菰口 太志

- 1 研究形態 発表校 () 準備校1 () 準備校2 (○)
(該当するものに○をつけてください)

2 学校教育目標

予測不能な未来を自立して生き抜く 知・徳・体バランスのとれた『人間力』のある生徒の育成

3 前年度の研究

(1) テーマ

主体的・対話的で深い学びを促すプロジェクト型学習の創造

～思考力・判断力・表現力の育成を目指して～

(2) 成果と課題

【成果】

- ・「1、2年生のときに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか？(R5年度全国学力学習状況調査アンケートより)」
上記の質問に対してH31年度は「あてはまる」「どちらかというにあてはまる」という肯定的な意見が約60%であったが、本研究によるプロジェクト型学習を導入後(R2年以降)、R3年以降は70%～80%以上もある。この3年間、各教科で様々なプロジェクトを組んで、授業を行ってきた。取り組む教科の学力や知識の習得、協働性や自己調整能力など、近年に求められる資質・能力、意欲や取組に夢中になる度合とその持続時間においても、より優れていることが実証されてきているプロジェクト型学習を取り入れたことによる成果が表れたと考えられる。
- ・本年度は毎学期に、授業評価アンケートを実施し、それを基に学力向上プランや次年度のシラバスを考えることによって、より具体的に授業改善を進めることができた。
- ・授業で思考させる際に「Thinking Time」を提示することによって、より明確に授業で思考する環境が整ってきた。R5年1学期末に実施した授業評価アンケートにおいて、肯定的な意見の割合が全学年90%以上もある。このことで、思考することの習慣のきっかけとなっていると考えられる。
- ・「何のためにその授業を学んだのか？」の意識の検証のために、生徒へのアンケート項目に「授業(プロジェクト型学習など)で学習したことが、他のことに活かされていると思った」を入れた。それにより、授業づくりの先にある意義を分析することができた。
- ・指導案にピクトグラムを導入して、授業の流れや目的をより把握しやすくなった。

【課題】

- ・プロジェクト型学習を次の学習につなげるため、授業者が指導内容の系統性や発展性について、十分な理解をもった授業づくりが必要である。
- ・「本時のめあて」の工夫が必要である。授業によって、知識・技能の定着を目的としためあてもあれば、生徒が主体的に考えたいくなる、わくわくするような展開を目的としためあてもある。授業づくりの段階で、ここを見極めて、めあての設定を行う。
- ・評価と指導の一体化を意識して、値踏みのためだけの評価（総括的評価）ではなく、個人の能力を引き出し、伸ばしていけるような評価（形式的評価）と指導を意識づける。
- ・「タブレットの活用」自体を目的にしないよう、授業で使用する際は、ソフト面の質を上げるために、「教科書・ノート」と「タブレット」のハイブリッド使用が必要である。

4 本年度の研究

(1) テーマ

「探究的に学ぶ力を身につけよう ～プロジェクト型学習の考えを基にして～」

(2) テーマの設定の理由

テーマの設定の理由は、次の点である。

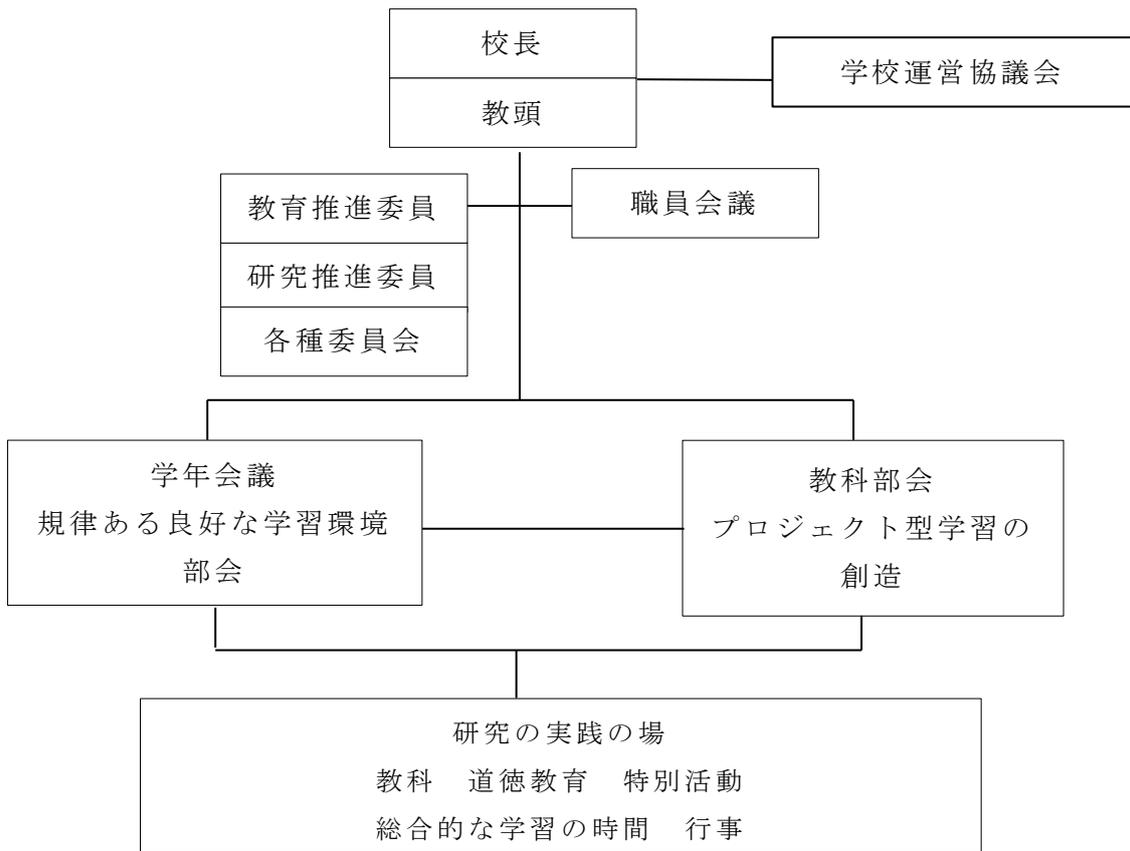
○全国学力・学習状況調査、授業評価アンケート、生徒の実態より

これまでの『一斉授業』を中心とした学校システムでは、『同じことを同じペースで』『言われた通りに』行う学びがほとんどだった昨今、学ぶ内容についても、既に『決まった問いと答え』があることがほとんどであった。しかし、現代社会を生きていく上では、『決まった答え』があることの方が少ないものである。将来生徒たちが、自分の人生を自分の思うように、生きていくためには、自分自身の問いを、自分の力で考え、解決する力が重要になる。

昨年度の全国学力・学習状況調査の生徒質問にて、「1, 2年生のときに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」という質問に対して、肯定意見を回答した生徒が約70%である。自分で考え行動する力が身につく、社会に出ても必要な問題解決力や実行力等を養うことが可能であるプロジェクト型学習を教科に取り入れた成果である。

一方で、R5年度3年生1学期授業評価アンケートにて、「授業以外にもその教科をもっと学びたいと思った」の項目の肯定意見が約60%であった。この結果から、生徒が自ら課題を設定するという点では課題が残っているといえる。そこで、前研究に引き続き、プロジェクト型学習の考えを基にして、主体的に学ぼうとする姿勢をさらに伸ばしていき、生徒の将来に役立つ生きる力を育成していきたい。

(3) 研究推進体制



アドバイザー

各授業研究のアドバイザー

未定

伊丹市教育委員会指導主事

(4) 研究推進計画

研究の方向性

- ① プロジェクト型学習の導入（探究する力の育成）
- ② 単元テストの実施
- ③ 学習方法のフレームワークの共有
- ④ 家庭学習の充実（「ドリルパーク」の積極的利用）
- ⑤ 学習指導のスタンダード「笹スタ5（ファイブ）」の徹底
- ⑥ 教科横断的な学びの積極的導入
- ⑦ 笹トレ（教え合い学習）の充実
- ⑧ 1人1公開授業の実施
- ⑨ 確実な検証（授業評価アンケートの実施等）
- ⑩ 自主研修の充実
- ⑪ シラバスの提示
- ⑫ 指導案にピクトグラムの導入（笹ピク19の掲示）

取り組み内容

①プロジェクト型学習の導入（探究する力の育成）

- ・効果的な単元にプロジェクト型学習を導入
- ・生徒が自ら課題設定ができるような「本質的問い」を明確にして、プロジェクト型学習を計画する

②単元テストの実施

- ・各教科で単元テストを実施することにより、単元ごとの振り返りを行う
- ・単元テストにより、よりよい評価ができる仕組みをつくる

③学習方法のフレームワークの共有

- ・笹トレの手法、思考ツール、ジグソー法など、積極的に授業に合った学習方法を共有する

④家庭学習の充実（「ドリルパーク」の積極的利用）

- ・個に応じた学習環境づくりとして、「ドリルパーク」を積極的に利用する
- ・自ら必要な学習課題を考え、家庭学習に取り組む

⑤学習指導のスタンダード「笹スタ5（ファイブ）」の徹底

- ・「確かな学力」を習得させる場は日々の授業であり、授業を行うための基礎・基本を明確に示したもの
 - ①めあてを示す
 - ②自分で考え、表現する時間を確保する
 - ③目標の達成度を確認する
 - ④学習内容をまとめる
 - ⑤授業の振り返りをする
- ・「考える時間」を生徒自身が自覚するために、「ThinkingTime」の掲示
- ・目標とめあての違いを明確にして、ゴール地点での生徒の姿の見える化を図る

⑥教科横断的な学びの積極的導入

- ・カリキュラム表の作成、活用により、教科横断的な学びを授業に積極的に取り入れる

⑦笹トレ（教え合い学習）の充実

- ・原則水曜日6校時総合的な学習の時間に、年間約20回笹トレを実施する。基礎的、基本的な知識技能の習得とピアサポートによる学習意欲の育成を図る
- ・生徒の1対2の教え合いをベースとする
- ・教え合いを笹トレだけでなく、授業に積極的に取り入れる
- ・笹トレチームの編成・配置は、学級担任を中心に行う
- ・教室担当教員のローテーションを行い、各班の取り組みを評価する

⑧1人1公開授業の実施

- ・全教職員が公開授業を最低1回は行う
- ・全教職員が最低1時間は公開授業を参観する

⑨確実な検証（授業評価アンケート実施等）

- ・学校評価の質問内容を検討し、生徒・保護者の評価や意見が正しく反映されるよう工夫・改善する
- ・学力調査（実力テスト、全国学力調査）、体力調査、学校評価のデータを分析し、

(13) () 性教育

(15) () 特別活動

6 研究発表日

(14) (○) 評価

(16) () その他「 」